
天国に吹く青い風

西野そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国に吹く青い風

【NZコード】

N9912D

【作者名】

西野そら

【あらすじ】

心から慕つた人を失う辛さ。それは、何にも例えようがない。ただ苦しさに苛まれて、時が癒してくれるのを待つだけ。寂しさを振り払うために、何かに無心になる。一瞬でもいいから、寂しさから逃れられるのだから。人間には、時間は一つしかない。早過ぎる。遅過ぎた。早過ぎたこと、遅過ぎること。すべてを織り交ぜると、青春の香りがするような気がして・・・私の想いは、真っ直ぐに届く信じているから。

～プロローグ～

真っ直ぐに、爽やかな気分で迎えた中学の入学式。

ほとんどが小学生からの友達で和気藹々。

ところが、蓋を開けてみれば、いつしかクラスは体たらく。

そんな雰囲気にすっかり染まってしまった私、中村暮葉。幼馴染の萱森拓海とは、その口ならぬ関係を冷やかされて、互いに避けるようになつた。

それからといふもの、私の世界はモノトーンで味気なく。

体育祭、文化祭、球技大会。

何をやっても最下位、最低評価、一回戦敗退。

私の楽しみといえば、仲良しで学級委員の長部由香里との遊びだけになつていた。

とうとう受験生になり、季節は駆け抜け、十月の合唱祭を迎えた。

高校に入れば、きっと清新な学校生活が送ると信じて、私は最後の学校行事を、適当にやり過ごすと決めていた。

ところが、待っていたのは担任の樺沢先生の情熱と、教頭先生の懐柔。

緊張感というより高揚感に包まれて、私はステージに佇むグラン
ドピアノと向き合つた。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節に（その1）

夏の余韻が完全に消え去った十月。

私の中学校では、毎年恒例になつてゐる合唱祭の季節がやつて来る。

大したイベントのないこの町には、住民の来場も自由で、毎年中学生の歌を楽しみにしている人も多いらしい。

現に毎年合唱祭が行われる学校の体育館には、用意されたパイプ椅子を埋め尽くす人が訪れていた。

中学生を繰り返すこと二回目。

とうとう私も、中学校に残ることが許されない年齢になってしまった。

そもそも合唱祭というものは、楽しみにする地域住民と、指導に熱を入れる教師のためのもので、私にとってはさほど大事なものではない。

大体、素人の指揮に合わせて、素人のピアノと素人の合唱を聞いて、何を感じるのであらうか。

私にとつては、合唱祭なんて巨大な時間の無駄でしかなく、それに強制動員される立場も考えてもらいたくて仕方がない。

何しろ練習するだけでも一苦労。

下手な指揮にみんなが惑わされ、音痴な人ほど声が大きい。

実際に始めてみれば、やる気のない男子と我慢して練習する女子が喧嘩する日々。

毎年同じことを繰り返して、誰も反省しない」との方が驚くべきことだ、これが舞台裏の真相。

もつとも、指揮者は公平といつぱりのべじ引き、伴走者は推薦といつのやうせ。

これでやる気と結束力が高まるはずもなく。

結果を見れば益々無惨で、振り返りたくもない忌わしい記憶しかない。

家に帰れば、一家総出で鑑賞に来ていた家族から批難の嵐。

「どうして、貴方たちのクラスは、あんなに下手くそなの。よくあれで、人様の前に出て歌えるわね。」

母親の小言が延々と続き、最後に父親から、

「最近の学校は、あんなのでも注意されないのであるのか。」

と、ありがたい苦言をもらひつ。

それが一年も続けてだから、私一人の問題ではない」とは、両親もさすがに理解していた。

三年生へ進級するにあたって、当然クラス替えをした。

けれど、蓋を開けてみれば、ステージ上で学級崩壊。体育祭をやれば、最下位を独走し、球技大会をやれば一回戦敗退する有様。

勝敗が決まつてしまえば、隣の応援席で暑さを紛らす無駄話に花が咲く。

早々に負けてしまえば、その分だけ教室で喋っている時間が増える。

努力しないことで、楽しみが増える」とに味を占めて、私のクラスというのは妙な凝集力をもつていく。

私は、学校生活を充実させる方法に、頑張ることと頑張らないことの一いつがあると思づ。

墮落するクラスにすっかり染まった私は、頑張らない楽しさを人生が始まつて十四年で会得してしまった。

「今年は最後だけど、それなりに合唱らしくなるの。やうは言つても、半分はあきらめはいるけどね。お母さんとしては、一回くらこまともな合唱を見たかったなあ。」

キッチンでテレビを見る私に向かって、私の母は洗い物をしながら、その背中が振り向くことはなかった。

「見たかった・・・つて。まだ終わってもないのに。」

私もテレビから視線をそらすことはなかつた。

私の母の中では、これから練習を始める今年の合唱祭も、すでに過去のものになつてゐる。

何度か行われた授業参観に来た母は、私のクラスが期待薄なことを漠然と掴んでいた。

そういう場の雰囲気を読み解く感度が鋭い私の母は、体育祭も球技大会も全滅することを予言していた。

実際、まったくそのとおりになつて、私の母は今度の合唱祭も“やるだけ無駄”と切り捨てた。

「まあ貴女の成績は、そんなに悪くはないし、高校受験だけは、ちゃんとやってくれればそれでいいわ。」

私の母の関心は、すっかり年が明けていた。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節に ～その2～

三連休を目の前にして、学校では合唱する曲の選択が始まった。

学年ごとに課題曲が用意され、その中から各クラスごとに曲を選択して発表する。

もちろん、クラスの数だけ曲が用意されているので、同じ曲を合唱することはない。

けれど、人気のある曲は、複数のクラスが選択するので、その場合、学級委員がくじ引きして決めることになる。

一方、私のクラスでは、相変わらずの体たらくで、まったく合唱祭をする雰囲気ではなかった。

「何でもいい。適当にやればいいんじゃないの。」

氣力ゼロの発言が、ホームルームに当然の「」と響く。

それを制する素振りも見せず、担任の樺沢先生は、窓際に置いた椅子に座り、窓の外を眺めているだけ。

「一応うちらも選べるんだから、うちのクラスとして、ちゃんと選んだほうがいいと思う。」

学級委員の由香里は、決壊寸前のクラスの防波堤として、いつも奮闘していた。

「長部さんの話とおつて、選ぶくらには、俺たちでしかやんとやるつよ。」

もう一人の学級委員の拓海は、教卓に手を突いて、今にも身を乗り出しそうな様子が毎度のことだった。

この一人が、解けそうな結束を必死に締め付ける役回りを背負つて、何とかこの半年やつてきたこのクラス。

自立という美名のもと、樺沢はこのクラスの運営を一人に任せきりで、自分は何かと忙しいと言つては、学校行事を適当に往なしてきた。

その点、樺沢より十分頼りになる存在で、私はこの一人を尊敬していた。

由香里と拓海は、これだけの駄々っ子を何十人も抱えた親のようで、私は見ていて切なくなることがある。

何と言つても、この一人だって、拓海は推薦といつやらせで、由香里は推薦ゼロでくじ引きの結果で指名された被害者。

やりたくもない仕事を押し付けられて、私からすれば不憫でならなかつた。

しばらく沈黙が続く重苦しい雰囲気に包まれる教室。

何かを言い出せば責任を問われる、一触即発のはち切れそうな状

況が居た堪れない。

私は下を向いた。

頭の上を意見が通過して、なるよくなつてくれればそれでいいと思つていた。

時計の針が進む音が教室に響く。

「萱森君、長部さん。煮詰まつているんだつたら、僕もちょっと

発言していい。」

樺沢の声が響いた。

私は、ゆっくりと頭を上げた。

ずっと窓の外しか興味を示さなかつた樺沢が、ゆっくりした声で語り始めた。

「みんなの意見がないみたいだから、僕が意見を言つね。僕が去年の合唱祭を聞いていて、好きだつた曲が『虹』なんだよね。候補がないんだったら、この曲にしてくれる。」

樺沢は語氣を強めることなく、淡々と言葉にしていた。

「そんなレベルの高い曲を、このクラスにできるわけねえじゃん。

男子の中でただ一人、幼い頃からピアノを習つてゐる結哉が囁み付いた。

「

「やつを知らぬ“何でもいい”って言つたよね。だったら、僕の希望を聞いてくれるかな。」

樺沢は、諭すような優しい物腰で言つと、一十歳も違つ生徒に対してへりくだつていた。

教師に下手に出られては、『理屈が上手』い生徒も反論することはできない。

黙りこんだ教室は、無言の満場一致で曲が決まることになつた。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節に ～その3～

昼休みになると、私の周りに入だかりができた。

「ねえ暮葉、伴奏やつてよ。」

一番聞きたくない話が、私の耳に飛び込んできた。

曲が決まれば、今度は指揮者と伴走者の推薦が始まる。

毎年の光景だったが、それが選りに選つて自分のところに来るとは思つてもみなかつた。

いつも気配を消し、存在感を薄めて、教室の中で透明な存在で居るよう努めていた私。

今回も無事に選曲を乗り越えて、このまま行けば、最後列に小さな声で合唱祭に参加する予定だった。

私にも事情がある。

ピアノは幼稚園の頃から始めて、この四月までレッスンを続けてきたけれど、受験を考えてこの一年はレッスンを休むことにした。

学区で一番の進学校に入ることが、私と私の家族の希望。

受験最優先で部活は早々に引退し、夏休みは夏期講習の予習復習に明け暮れた。

日焼けすることなかつた私の肌が、この半年の努力の証。

その甲斐あつてか、今は模擬試験でA判定をもらえたよつになつたし、二者面談でも堂々と志望校を言えるよつになつた。

私は今の状況を変えたくはなかつた。

第一志望を誰にも邪魔されたくはない。

学校のことなど無関心で、自分のことだけを考えて入試当日へ向かつて走り始めた私は、突然田の前にハードルを置かれた気分は最悪。

到底承諾できるわけもなく、私はきっぱりと断ると、そのまま教室を飛び出した。

屋上に出た私は、金属フェンスを掴むと、眼下に広がるグラウンドを見下ろした。

自分の中から沸き起こる怒りで、フェンスを握る手に力がこまる。

「中村。なんか、みんなが詰め寄つたらしくて、本当じめん。俺が、中村のピアノがうまいって言つたから、みんなが押し付けようとして。そんなつもりなかつたんだけど。」

拓海の視線が、私の背中を突いた。

「放つておいてよ。」

私は、不満を撒き散らしていた。

収める場所がない不満の捌け口として、私は拓海を選んだ。選んだというより、そこに居る人なら誰でも良かった。

私は邪魔されたくなかった、自分の未来と、自分の生活を。

ピアノの練習時間だつて馬鹿にならない。

そんな時間があるのだったら、机に向かう時間に充てたい。

休み時間、通学時間、通塾時間・・・細切れの時間を切り詰めて、勉強時間を確保してきたこれまでの生活。

これからは、大っぴらに勉強できる時間と環境の確保が、私にとっては最大の関心事。

誰にも邪魔されたくないプライベートに十足で踏み込まれた私は、後味の悪い喪失感を噛み締めていた。

「あのさ、中村。」

「こんな時に苗字なんかで呼ばないでよ。」

言いかけた拓海の言葉を遮るように、私はフエンスの向こうへ声を張り上げた。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節 ～その4～

拓海と私は保育園の時から一緒にいた。

だから幼馴染よりもずっと距離感が近くて、兄弟のような感覚で、何の遠慮もない気の置けない存在だった。

小学一年生のとき、遠足に行ってお昼ごはんを一人きりで食べた。もちろん他の子どもには冷やかされたし、その意味すらわからなかつた子どもいた。

その様子を見ていた教師たちが、唖然としていたことを強烈に覚えている。

小学五年生のとき、祖母が亡くなり、私は気分が沈んで辛かった時期があった。

行き詰った私は、拓海の家で一夜を明かした。

何も言わずに拓海は、ずっと寄り添ってくれた記憶が、今も鮮明に心の中。

中学に入つてからも、拓海は私のことを名前で呼んでくれていた。けれど一年生の一学期、それに気づいたクラスの中で、拓海と私は浮いてしまった。

一緒に登校すれば同伴出勤。

少し視線を合わせただけで若夫婦。

誹謗中傷に晒された拓海と私の関係は、一気に冷え込んでいった。

通学路を変えて、教室では顔も見ない。

一時的な非難措置だつたはずが、それがいつしか当たり前になり、気がついたらもう一年以上会話もしていない。

最初の寂しさを通り越すと、濃密な人間関係が消えてしまい、一気に自由度が増した自分の時間に浸るようになる。

「最近、拓海君、遊びに来ないね。」

テレビを見ながらお茶を飲む母は、疎遠になつた拓海と私の関係を見透かしたように、さらりと口にした。

二人の関係が断ち切られたあの時まで、拓海は学校の帰り道に私の家へ出入りすることがよくあつた。

だから急に来なくなれば、関係が怪しくなつたことが一挙に露呈する。

母がその日以来、拓海のことは口にしなくなつたことを、私は今になつて気づかされた。

私が拒絶反応を示したことで、選考は振り出しに戻っていた。

とりあえず曲だけは決まったものの、指揮や伴奏はおろか、各パートの振り分けすら満足に進んでいない。

私の説得に失敗した拓海は、クラスで求心力を失い、司令塔を失った群集は思い思いの方向に迷走し始めていた。

放課後になつても何も決まらない。

合唱希望曲の申請を終えて帰ってきた由香里は、申請どおり決定したことを告げた。

何の反応もなく、滯留する倦怠感。

明日から強調週間にに入る学校は、すべてが合唱祭モードになる。

強調週間の間、部活は中止、授業は短縮授業になり、その分放課後の練習時間が確保される。

すでに隣のクラスから歌声が聞こえ始めていた。

『はじまり』、『予感』、『信じじる』。

スタートした他のクラスに、焦り始めたのは数人で、まだまだ濁んだ雰囲気に浸っているその他大勢。

「ねえ暮葉、ちょっと来て。」

由香里が私の手を引いて廊下へ連れ出した。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節に（その5）

「萱森君と何かあった。なんか、元気なかつたから。暮葉が怒つてたら悪いんだけど、暮葉にピアノを弾いてもらいたいって言つたのは私なの。それで説得してもらうのを萱森君にお願いしたの。私が言うと、なんか気まずくなりそうで、つい他の人にお願いしちやつたの。だから、ほんとごめんね。」

謝る由香里に私の怒りは冷め切つていた。

「別にもう何とも思つてないから。それに由香里が私を選んでくれたつてわかつて、本当にうれしかつた。でも、私じゃなくても、他にやる人いっぱいいるから、他にお願いして。」

私は由香里との仲を大切にしたかった。

「ダメ。他の人じやダメなの。私は暮葉のピアノがいいの。暮葉は私の誕生日にショパンを弾いてくれたじやん。私はあんな切ない暮葉のピアノが、私はいいの。私がやる気ないやつを全部なんとかするから、お願ひ暮葉。」

手を合わせる由香里の説得に、私は困り果てていた。

断れば関係にひびが入る。

拓海との関係にも、完全にひびが入つてゐる今、これ以上自分の人間関係に傷を負いたくはない。

だけど、目の前の受験で目一杯になりつつある私に、これ以上の

負担を背負える精神的余裕もない。

何とか事態を開拓したい私は、由香里の手に自分の手を添えた。

「ねえ。私は由香里が思つてゐるほど上手くはないよ。なんか由香里、ちょっと頑張りすぎて疲れてるんじゃない。もう少しうつと冷静に、いろんな人に当たつてみてよ。私も一応考えておくから、ね。」

私は由香里を連れて教室に戻った。

結局その日の放課後は、何もせず、何も決まらないまま解散になつた。

教室中が有耶無耶の中、私は早々に校門を出た。

学校のグラウンドに沿つようつ伸びる真つ直ぐな一本道を歩いて踏切を渡ると、もうすぐ私の家。

学校から十分ほどの通学路を足早に、私は家路を急いでいた。

その通学路の途中には墓場があつて、私の家の墓もある。

昔からこの場所にあつたため、周辺に住宅地が造成されても、この墓場だけは残された。

だから、今となつては、この場所に墓場があること自体を嫌がる住民も出てきている。

いつも気にかかる」となく通過する墓場の前で、私は足が止まった。

私の家の墓石を前に、拓海が立ち尽くしていた。

しばらへ様子を伺つたが、まったく動く気配はない。

横顔は今にも泣き出しそうな、切なさを浮かべている。

私は、拓海の後ろに近づいた。

「なにじてゐるの。」

聞こえてくるはずの私の声には耳も貸さず、拓海はじっと墓石を見つめてくる。

拓海と私は、よくこの墓場でも遊んでいた。

お盆になれば、一緒にお墓参りもして、提灯を持って夜道を歩いた。

「俺、暮葉に悪いことしたなって思つて。今まで、暮葉を本氣で怒らせたことなんて一度もなかつたし。俺が生まれたときには祖母ちゃんは居なくて、暮葉の祖母ちゃんにすげえ可愛がつてもらつたから。暮葉の祖母ちゃんにいつも、暮葉と仲良くしてくれつて言われてたのに、今日初めて暮葉を泣かせてしまつて。暮葉が辛いからと思って、無理して話さないようにしてきたけど、それも良かつたのか、俺にはわからない。」

拓海は確かに、私ではなく、私の祖母と話をしていた。

私は、拓海の背中を黙つて見つめるしかなかつた。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節に ～その6～

拓海と私が、通学路を一緒に帰るのは一年ぶり。

丸一年、ポツカリ開いた空白に、会話もすぐに立ち消えて、余所余所しい感じが心地悪い。

「ねえ、今日は寄つていかない。」

私は拓海を家に招き入れた。

「あら久しづりね、拓海君。」

私の母は、すぐにリビングのドアを開けた。

私の母が、テーブルの上を片付けるのを待つて、拓海と私はソファに座った。

座つてみたものの、二人の間には切ない距離が残る。

やつぱり会話が続かない。

見兼ねた私の母が、タイミングを見計らって、ジュースをテーブルに乗せた。

「一人とも、なに遠慮してんの。どうせ一年も口利いてないんでしょ。その間に溜まりに溜まつたものが、お互いあるんじゃないの。ちゃんと正直に話したら。いいで話さなかつたら、あんたたち、一生後悔するよ。」

私の母は、テーブルの上のつまらないテレビを消すと、すぐに席を外した。

私の母は、やはりすべてをわかつていた。

拓海と私の関係が「じれたことは、ただの思春期の問題ではない」とを見抜いていた。

広いリビングに二人きりにされた拓海と私は、ゆっくりとお互いの視線を合わせた。

一人きりにされてしまつと、何を話していいのか、自分の中で整理がつかない。

カチンコが鳴つてフィルムが回つているよつた、あたりの静けさ。

石油ファンヒーターの音だけが、一定のノイズを刻んでいる。

「なんか照れるよね。」

私は拓海の顔に笑顔を振りまいた。

「なんかこいつの久しぶりだな。」

拓海は私の目を真つ直ぐ見ていた。

「ねえ。私、変わつてないよね。ずっと、変わつてないよね。」

拓海のほうへ体を向けた私は、すがるように問いただす。

「変わったよ、暮葉は。もちろん、いい意味で。ちょっと気が強いのは昔からだけど、大人になつたし。でも、前よりも纖細になつたかな。前はもつと大らかだつたし。まあ受験とか、人間関係とか、ストレス溜まつてるんだろうけど。」

拓海は、申し訳なさそうに、私を語った。

「私が臆病だったから、拓海にも迷惑かけたかもしない。別に幼馴染なんだから、一緒に居たつておかしくないもんね。でも、好きとか愛してるとか、そういう感じじゃないんだよね。もう私の生活の一部つていうか。だから、これからも一緒に居てほしいなつて。笑わないでよ、一応真剣なんだから。」

私は、もう一度拓海の顔を見やつた。

「別に笑わないよ。俺も、暮葉がいないと、なんか物足りないっていうか。また一緒に登校したいなつて思つてたから。いいかなあ。」

「

拓海の顔に向かつて、私は黙つて頷いた。

「また、一緒に頑張つてこいつな。どうせ、この世は男と女しかいないんだから。」

「なにそれ。なんかいい」と言つた、拓海。そうだよね、男と女しかいないんだもんね。」

私の中で今までの恥じらいが吹つ切れた。

「ねえ、今日ははつちで『飯食べていかない。昔みたいに、ね。』

私は、拓海の冷たい手を握った。

「たまにお鍋もいいわね、人数多いほうが美味しいしね。」

外で聞き耳を立てていたのか、話が煮詰まつたところで、私の母はリビングへ戻ってきた。

第一話 秋が来て、合唱祭の季節に～その7～

「それで、一人はちゃんと仲直りできたの。」

食卓を囲んで、まもなくだった。

私の母は、やつぱりその質問をしてきた。

「仲直りって、別に喧嘩したわけじゃないし。」

私は鴨鍋を突付きながら答えると、私の母は意外なことを口にした。

「どうせ、貴方たち結婚するんでしょ。」

箸が止まり、私は拓海の顔を見た。

お互い目を合わせて、また目をそらす。

「どうか。じゃあ、いつ嫁に行つてもいいぞ。」

拓海と私が恥ずかしさを隠すのに精一杯などいふに、私の父は追い討ちをかける。

「ちょっと、なにそんな勝手なこと言つてゐるの。」

私は慌てて否定してみたけれど、もはや火の車で、何を言つてもこの雰囲気を打ち破ることは難しかった。

多少お酒が入って、気分がよくなってきた私の父は、若い男と女を捉まえて「機嫌な様子。

拓海と私が言葉を差し挟む余地はなく、宴は淡々と時を刻んでいった。

ようやく夕食が終わると、玄関まで拓海を見送りて、私はリビングに戻った。

私の父は、酔い覚ましの風呂に入つて、家中は静けさを取り戻す。

片付けを終えた私の母が、リビングに入つてくると、そのまま私の隣に座つた。

「ねえ、さつやくいつたこと、気にしてる。」

母は、私の顔色を伺つと、さらに続けた。

「やつぱり気にしているの。あれ、本当に嘘じゃないから。何とか私の予感だけど、貴方たちは結婚しそうな気がするの。ずっと子どもたちから見てきて、きっと思春期にはいろいろあるだろうけど、それを乗り越えたら、きっと結婚するんじゃないかなあつて。」

母の勘に逐一付き合つていいたら切りがないので、私はそれを否定した。

「そんなのただの勘でしょ。」これから、いろんな出会いがあるんだから、付き合うとか結婚とか、そういうのはあり得ない。」

それを聞いていた母は、私をそつと見つめた。

「私も、昔好きだつた男の子がいたんだよね。ずっと保育園のときから一緒に、中学校までは仲良かつたんだけど、好きだとか、付き合うとか、そういう愛情表現ができなくて、結局疎遠になっちゃつたんだけどね。だから貴方たちには、そうなつてほしくない。ただ、私の場合は、ただ近くに居る相手でしかなかつたの。ただ近くにいる男でしかなかつたから、我慢になつて衝突して失敗した。でも貴方たちの場合は違う。ちゃんとお互いを想い合つてる。相手を想い過ぎて、我慢するから自分が傷ついていく。だけど自分が傷ついていたら、どんどん自分が辛くなるでしょ。そんなの楽しくないじゃない。好きなら、誰に何と言われようと、堂々としてなきや。」

私は黙つて頷くだけで、母の話に聞き入つていた。

「わかつた。ちゃんと向き合つてみる。それで、その男の人とはどうなつたの。」

私は母との距離を詰めて、体を寄せた。

「その人とは、結局上手くいかなかつたけれど、成人式の日に会つたら、当然だらうけど新しい人がいて、就職したら一年も経たないうちに結婚したみたい。でも、すぐ後の同窓会は来なかつたの。」「なんで？結婚生活が忙しかつたの。」

初めて聞く母の思い出話に、私は相づちを打つ。

「その逆。すぐに別れて、手続きやら引越しやらで、同窓会ゼビ」

ろではなかつたみたい。」

「それって、チャンスだと思わなかつた？」

意外な展開に、私は黙つていられなかつた。

「でも、そのときは暮葉がお腹に居たからね。この子のいい母親にならなきやいけないつて思つてたから、今度は私がそれどころじやなかつたかも。人間つて、一度すれ違つてしまふと、なかなか元には戻れないもんだよね。だから、今を大事にしないと。男の子は、優しくしてあげないと、すぐに逃げて行つちゃうから。暮葉は、私みたいな失敗をしちゃダメだよ。堂々と胸を張つて、自分の生き方を貫いてほしいな。」

そう言つと母は、私の肩をそつと抱いた。

私がお腹に居なかつたら、すれ違つてしまつたその人と一緒になつた？

私ができてしまつたことは、もしかして重荷だつた？

聞きたいことは山ほどあるけれど、私を抱く母の手は、少し震えているような気がして、それ以上何も言えなかつた。

本当に久しぶりに母の胸に抱かれて、伝わる温もりに体が温まつてくると、私は気持ちよく寝息を立てた。

第一話 虹色の気持ち ～その1～

明くる朝、私は勢いよく玄関のドアを開けた。

明るい日差しと引き換えに肌を刺す寒さが待っていた。

大きく深呼吸して、周囲を見回すと、玄関に寄りかかっている拓海。

「なにしてるの、こんなところで。迎えに来たんだつたら、中入ればいいじゃん。」

私はその奇怪な行動を理解できなかつた。

「なんとなく、待つてみたかつただけ。」

拓海は本心を隠して素つ氣なかつた。

「今日から、ちゃんと堂々と行こうね。私、拓海のこと、ちゃんと好きだから。」

私は自分の目に力を込めた。

「今日は、なんだか知らないけど、熱いな。そんな暑い暮葉、いいな。」

今日初めて、拓海は私に笑顔をくれた。

学校が近いと、途中で友達と合流して一緒に通学というわけには

いかない。

拓海と別行動を取るようになつて、毎日一人で通つた道を、今日からまた一人で歩いてみた。

やつぱり一人より一人のほうが楽しい。

一人より一人のほうが、通学時間が短く感じる。

残り少なくなった中学生活も、これなら退屈しなくて済みそうだ。

学校の校門を通り過ぎると、急に人が増えてくる。

堂々と一人で通学していると、冷やかす人は案外いないものだ、とわかつた。

もちろん自分が三年生になつたから、ということもあるだろうけど、同級生からも、今日は何も言われなかつた。

「なんか、大したことなかつたね。」

下駄箱で靴を履き替えながら私は言つた。

「元々、公認の関係だからな。」

拓海は私以上に開き直つていた。

もしかすると、拓海のほうは、ずっと割り切つていたのに、私が割り切れずに、恥じらいの殻に閉じこもつていたのかもしれない。

私は拓海に悪いことをした、と思つた。

だから、何を言われても笑顔で堂々としているようと思つ。

それが、拓海が一番望んでいることだと思つたから。

薄暗い廊下を抜けて、一人で教室の入口に立つ。

いつも教卓の周りで暴れている男子。

机の周りを囲んで談笑する女子。

変わらない面々がそこに居るのに、今日は彼らが、とても小さく
見えた。

第一話 虹色の気持ち ～その2～

席に座ると、隣の席の結哉が話しかけてきた。

「昨日の合唱祭の話だけじゃ、俺が指揮するから、お前伴奏やれ
よ。」

結哉は单刀直入に私を口説いた。

「水沢のほうにん、伴奏すればいいじゃん。男の子がやつたほう
が田立つじやない。」

私は結哉と視線を合わせる」となく答えた。

結哉とは、中学に入つてから一緒になつた友達。

縁があつて、ずっとクラスは一緒に、一年生のときから伴走者と
して合唱祭の常連になつてゐる。

「この曲は、やっぱり女のほうが纖細でいいと想つんだよ。とい
うより、俺は一度も金賞を取つたことがないんだよ。今年は最後だ
から、一回くらい取つてみたいんだよ、金賞。お前も一緒だつたら
わかるだろ。お前の腕だつたら、こんなの初見で弾けるだろ。」

結哉も少し合唱祭に逆上せ上がつてゐる感じがした。

別にグラントプリを取つたからといって、音楽の世界でテレビで
見るわけでも、賞金が山分けになるわけでもない。

得られるのは精々、他のクラスより少し大きな拍手と一瞬の優越感だけ。

そんな一時的なことに、私はあまり関心がない。

「たとえ弾けたとしても、私は正直、合唱祭にあまり興味がないから。後ろで小さな声で歌つて終われば、それでいいの。あんまり目立たたくないから。」

私のほうも、単刀直入に断つた。

程なくして、担任の樺沢が教室に入ってきた。

今日から合唱祭の強調週間になるため、通常50分の授業が、45分で行われる短縮授業になる。

午後も早々に授業を切り上げ、部活も活動停止で、校内は完全に合唱祭一色。

廊下には合唱祭のポスターが貼られ、学校の校区内にもポスターが配られ、有志が人の集う場所に貼っていく。

この町で年に一度のイベントが、すでに走り出していた。

朝の連絡を終えると、一時間目のホームルームを前に、一旦樺沢は教室を出た。

数分して戻つてくると、手にはクラシックギター。

「今どき、ギターで歌うのかよ。」

冷やかす声を尻目に、樺沢はギターケースを開けると、チューンングを始めた。

「どうせ指揮者も伴走者も決まつていないんじょ。だつたら、とりあえず練習しませんか。」

樺沢は生徒たちを急かした。

「その前に、指揮と伴奏を決めたいんですけど。」

学級委員の由香里は、昨日の続きを再開しようとすると、樺沢はそれを制した。

「どうせ推薦で誰かにやらせようとするんでしょ。それはやめましょう。させられる人が気分を害しますから。」

樺沢は初めて生徒の不文律に踏み込んだ。

教師と生徒の不思議なバランスを、自ら壊す行為は、この奇妙な安定を崩すことになりかねない。

樺沢自身の立場も危なくなることを、あえてやるほどリスクを犯す必要があるのだろうか。

私には疑問でならなかつた。

「中村さん。」

樺沢は、私の名前を呼んだ。

一斉に私に視線が集まる。

「僕は、中村さんのピアノが聞きたいんです。中村さんの力を貸してもらえませんか。」

私は黙つて樺沢の言葉を聞き入った。

「僕の都合を言つて申し訳ないんですが、僕はこの学校に来て5年になります。おそらく、この春には異動になると思います。前に居た学校では、こんなに町中の人々が来る合唱祭はありませんでした。そしてこれから行く学校でも、こんなに温かい合唱祭はないと思います。どうか、僕の最後のお願いだと思って、僕に金賞をください。」

「

私は押し黙つていた。

どう返事をしていいのか、言葉が浮かばない。

樺沢が生徒の行動を注意したのは初めてだったし、こんなに丁寧に物事を依頼されたのも初めてだった。

なにしろ、教師としての威儀がない。

ただの中年の男が、中学生に願いごとなど聞いたことがない。

私は流れ星でもなければ、サンタクロースでもない。

態度決定に困った私は、授業中にもかかわらず、徐に教室を出た。

「ちよつと、外でゆっくり考えてきます。」

唚然とする教室の雰囲気を尻目に、出て行く私を樺沢は引き留めはしなかった。

第一話 虹色の気持ち ～その3～

体育館の接続廊下には、いつもグラウンドを眺める人が居る。

朝から一時間ほどかけて学校を一巡し、最後にこの場所から、移ろい行く景色を観察するのが田課。

彼の行動を知っている私は、気に入らないことがあると、この場所に来ては憂さ晴らし。

いつも悩みを聞いてくれた教頭先生が待つ場所へ、私は自然と歩を進めていた。

「お、また来ましたね。そろそろ来る頃じゃないかと思つてしまつたよ。」

教頭は、なにも咎めることがなく、私を受け入れてくれた。

「また、来ちゃいました。ごめんなさい、いつも面倒かけちゃつて。」

教頭の前では、私は子どもになつてしまつ。

祖父と孫くらいい離れた年齢が、私には安心感があつて、なんでも気軽に話せてしまつ。

「暮葉ちゃんは、面倒くさがりだからね。せつかく才能があるのに、それを使おうとしない。どうせ、合唱祭で面倒なことを押し付

けられて、嫌になつたつてところでしょう。」

私は静かに頷いた。

「一回くらい、いいんじゃないんですか。私もたまに聞いてますけど、音楽室でサラッと弾いている音色は、他の誰よりも感性に訴えるものがありますよ。大体、どこで習つたんですか、そのピアノ。」

教頭は、いつも丁寧な話し振りで、私の頑なな性格を解していく。

「私の場合は、気づいたら母がピアノを弾かせてた。それからすぐには、近所のピアノの先生に預けられて、しばらくすると、その先生の先生とかいう人がたまに来るようになつて、それからずつと勝手に指導しに来てる。」

私は、頭の中で自分の短い半生を辿つてみた。

「英才教育ですか。やつぱり育ちが違うわけですよね。洗練という言葉がふさわしいと思いますが、音というのは、人の生き様が出るんですよ。真っ直ぐな人は、濁りのない音が出ます。恋をすれば、優しい音になるし、気分が荒れれば、苛立つた音になります。それは素人が聞いても、よくわかるものです。だから、今出せる音は、今しか出ない音なんですよ。どうです、一生の思い出に。私が録音しておきますよ。」

教頭は、私に演奏するよう促していたが、私は煮え切らなかつた。

「やつとき、樺沢にも同じこといわれた。自分は来年異動するから、最後にピアノ弾いてくれつて。それも、すつこじ丁寧な言葉で、力

を貸してください、なんて。でも、そんなお仕着せられても。「

私は、今の気持ちを正直に言つてみた。

「はあ、樺沢先生がそんなこと言つてましたか。まあ、確かに春には異動になつても可笑しくない年数ですがね。それにしても、あの樺沢先生が暮葉ちゃんに惚れ込んだか。あの人は、滅多に人を褒めないですよ。その人が入れ込むなんて、よほど金賞が欲しいんでしううね。で、そのプロポーズを受けるんですか。」

教頭は、さりげなく言葉を摩り替えた。

「そんなプロポーズ、興味がない。大体、金賞なんて取つたから、どうなるわけでもないし。」

私は、温かい教頭を、また冷たくあしらつてしまつた。

「樺沢先生は、『自分が合唱祭に出たことがないんですよ。先生になつてから初めて、合唱祭を体験して、その素晴らしさを知つた。だから、ずっと金賞を取りたくて、密かに努力してみたけれど、クラス編成の運に恵まれなくて、この学校に来ても未だ金賞は取れず仕舞い。今年は、是が非でも欲しいところでしょうね。』

教頭は、樺沢の境遇を解説して見せた。

「そう・・・。私、もしかしたらひどい女かなあ。嫌な女かなあ。」

「

私は教頭の横顔を伺うと、視線はグラウンドのはるか遠くを見据えている。

「優しい人だと思いますよ。暮葉ちゃんは、優しい子です。」

教頭は、決して答えを言わない人だ。

私は、同じように遠くを見つめてみた。

「樺沢先生は、ギターは弾けるけど、ピアノは弾けないんですよ。

」

私は、今朝の樺沢が持ってきたギターケースが思い浮かんだ。

「『自身が、音楽に魅せられたのは大学に入つてからで、もうそのときには指が硬くなつて、ピアノは弾けなかつたそうです。随分後悔したようですよ。もつと早くピアノを練習してたらよかつたつて。だから、ピアノを弾ける人が、羨ましいんですよ。特に、上手く弾ける人は、羨ましくて仕方がないんです。話によると、ご自分のお子さんは男の子だけど、ピアノを習わせてるそうです。まあ、大変な熱の入れようですな。』

教頭の、他人事のような真面目な話を、私は黙つて聞き入った。

「ねえ、なんでそんなに詳しいの。」

私は、ようやく気になつて仕方がなかつたことを訊ねた。

「いっぱいお酒、飲ませましたからね。」

教頭は、顔を私に振り向けると、そつと微笑んだ。

「じゃあ、行つてみますか、音楽室。」

教頭は、私を連れて音楽室へ向かつた。

第一話 虹色の気持ち ～その4～

音楽室は、静まり返っていた。

教頭は、音楽室の中に入ると、グランドピアノの上に上がっている紙の山から、楽譜を取り出した。

「3年7組は、この曲でしたね。」

手渡された楽譜を、私は楽譜台に立てるとい、艶出し塗装の蓋を開けた。

「私は、ここで聞いてますね。」

やつ語り、教頭は一番前の席に腰掛けた。

私は、しばらへ譜面を田で追つと、ゆっくりと鍵盤を奏で始めた。音は大雑把に掴んで弾いているだけで、決して上手に弾けているわけじゃない。

ただ、音が追えてるといった感じで、満足がいくようなものではない。

それでも、教頭は黙つて私の演奏に聞き入っている。

教頭の様子を横目で見ながら、必死に譜面を追つて演奏し終わると、私は背もたれに寄りかかり、大きく息を吐いた。

「いいじゃないですか。」

拍手をしながら、私に歩み寄ってきた教頭は、優しく声をかけた。

「やっぱり私が見込んだだけあります。もう一つの点で二つたところでしょうか。細かい点を修正すれば、問題ないでしょう。」

教頭は、楽譜をまとめて、私に手渡した。

「これは、貴方のものです。」

楽譜を手渡した教頭は、そのまましっかりと私の手を握った。

齡を重ねてきた手は、分厚くて温かかった。

第一話 虹色の気持ち ～その5～

教室に戻ると、音楽室以上に寒々としていた。

開いていたドアから中へ入ると、一斉に視線が集まる。

迫つてくるようなたくさんの顔が痛い。

授業中に勝手に抜け出して、樺沢の依頼まで拒否した私を、この教室が受け入れるような状況にはないことは、すぐにわかった。

ただ私には、急けることに慣れきったこのクラスが、なんで沈んでいるのか理解できない。

また適当にやれば、やり過げせるのに、なんでこの人たちは落ち込んでいるのだろうか。

きっと、樺沢の異様な熱意を、生徒は敏感に感じ取ったのだと思った。

尋常ではない樺沢に、初めて本気を感じた。

それは、私も同じだった。

だからその本気が、私には熱すぎて、火傷しそうになってしまつた。

一気に上昇する自分の体温を下げるには、私は外に出るしかなかつた。

そんなことは誰も知る由もなく、理解できるわけもなく。

何を言つてもいい訳になるだけで、私は何も言わずに立ち去りはじめていた。

教卓の上に座つたままの樺沢は、生徒の視線につらうれてようやくへやはりよひて、私を確認した。

「おお、悪かつたな。なんか無理言つてしまつて。」

樺沢の目を潤す涙が、薄つすら厚みを増したような気がした。

「『はじめんなさご』、ちょっとフラッとしてきました。でも、すつきりしました。ちょっと冷静なつて考えて、私にできるじとをやれつかなつて思つて。」

私は真つ直ぐに樺沢を見つめ返すと、樺沢の目つきが変わつた。

樺沢は、手にしていた楽譜を胸の前に掲げた。

私は、手にしていた楽譜を見つめ返してきている。

「『れ、やつぱり私がやります。この楽譜は、私のものだと思いまます。なんとなく、私を待つているような気がします。ダメですか？』

樺沢は凍り付いたように、視線をそらさない。

「いいんですか、本当に。」

私は大きく頷くと、樺沢は座っていた教卓から立ち上がり、私の手を上から握った。

「中村さん、ありがとうございます。本当にありがとうございます。」

薄く柔らかい手だった。

纖細な、確かにギターを弾くような、細く綺麗な指だった。

私の手を離した樺沢は、振り返ると小声でつぶやいた。

「よし、優勝できるぞ。中村がやるんだから金賞、取れるかもしれないな。」

樺沢の言葉に一瞬、教室が引き締まった。

緊張感と高揚感が入り混じる、とても気持ち悪い感覺。

「とりあえず、役者が揃つたから、これで何とかなるだろ。」

これから合唱祭を仕切るのは、やっぱり結哉だった。

短縮授業だと、すぐに毎休みが来て、あつという間に放課後がやって来る。

「ねえ、もうひと練習するよ?」

由香里がクラスを早速煽った。

「俺が指揮をやるから、ちゃんと練習してくれよ。」

結哉は学生服を脱ぎ捨てて、もう一枚シャツ一枚になっていた。

「みんなも予定があるだらうし、短時間で練習して、早く終わらうよ。」

拓海は不満を溜めている男子をつまづきとめてくれた。

「おい、音楽室に移動だ。」

樺沢が駆け込んできて、生徒を急かした。

樺沢は、拓海に音楽室の鍵を渡し、教室に残つて練習を済む男子を一人ずつ追い出しにかかる。

「今日、無理やり音楽室を取つてきたから、頼むよ。」

樺沢は一人ずつ生徒にお願いして回つていた。

「なんか知らないけど、樺沢は気合入ってるよな。」

口々に樺沢の熱意に根負けした男子が愚痴をこぼしながら、仕方なく廊下を歩いていく姿を見届けると、私は最後に教室を出た。

廊下で待つていた樺沢と田が会つた。

「「」なんことしかできないけどな。」

樺沢は言葉をこぼした。

私に言つたのか、独り言だつたのかはわからない。

ただ、私には樺沢の言葉が耳に残つて離れなかつた。

第三幕 めつと私はめいめて ～その1～

音楽室のグランピアノは随分な年代物。

昭和42年寄贈であるから、今から40年も前の代物といふことになる。

長い間、この部屋に居座つて、入れ替わり立ち替わりする生徒と比較して、私はどう映つてゐるのだろうか。

朝は教頭先生と一緒にたから気にもかけなかつたけれど、一人でピアノに向かうのは気が重い。

私はブレザーを脱いで椅子の背もたれに掛けた。

「そういうえば、暮葉のピアノを初めて聞く人、多いんじゃない？」

由香里は、椅子に腰掛けたばかりの私の肩に手をかけた。

考へてみると、ピアノ教室での演奏会など、自分一人でステージに立つことは珍しくない。

ドレスを着て、少しおめかしをして、立つたステージに当たるピンスポート。

すべての視線を一身に浴びる緊張感と快感に襲われる。

自分のペースで演奏を始めて、終われば自分が喝采を浴びる。

もちろん、放課後の音楽室で、友達だけの「リハーサル」のよつなことはやったことがある。

だから、学校の中で、私がピアノを弾けることを知っている人は少くない。

けれど、合唱の伴奏は、今まで経験したことがなかった。
伴奏とは、一種の独占欲を押し殺して、合唱の縁の下に徹すると
いうこと。

こんな窮屈な演奏をしたことはない。

こんな窮屈な制服を着て演奏したこともない。

歌う生徒を前にして、照明もないステージの一番奥に押し込められて演奏したこともない。

段々思い詰めてみると、指揮者に合わせて演奏したことなど一度もない。

教頭先生の懐柔策に乗せられて、物事を簡単に考えていた私は、徐々に不安に駆られ始めていた。

私の前奏に続いて、クラス全員が歌い出した。

譜面越しに、私は樺沢の様子を伺った。

順調な滑り出しに、窓際の席に座つて様子を見ていた樺沢の表情に安堵が感じられた。

少し嬉しくなった私は、また鍵盤に視線を落とした。

指揮をする結哉の手が止まり、私の伴奏の音が消えると、一瞬の静寂を置いて、誰からともなく歓声が上がった。

一度もなかつたクラスの一體感というのが、私にも感じ取れた。

湧き上がる雰囲気を抑えるように、樺沢は全員に楽譜を見るよう指示した。

ピッチを外した箇所、音の長さが違つ箇所を次々と指摘する。

まずはスコアのとおりに曲を起します。

それから、自分なりのアレンジを施していく。

音楽の基本を、樺沢は言葉を丁寧に説明した。

生徒の顔が納得するまで、一人一人の顔を見つめて語りかける様子を、私は一人ピアノの前から見つめていた。

ここからは、樺沢と生徒の根比べが始まることは、わかつていた。

一回は気持ちよく歌わせる。

でも、一回目から、樺沢は合唱を何度も止めた。

止めては、修正箇所を指摘して、微調整することの繰り返し。

これが、やらされた側としては、フラストレーションが溜まる一方。

だれる顔、ふてくされる顔が次々と現れ、一気に雰囲気は沈み込んでいく。

勢いでスタートしても、最後まで勢いは続くものではない。

なんで歌うのか、その意味もわからないままで突入した合唱際の強調週間に、結局は意味を見出せないまま。

伴奏している私も、この意味はわからないまま。

学校行事の一翼を担わされた瞬間、とても息苦しい辛さだけが募つていく。

手詰まり感が出てきた音楽室は、夕暮れまで奮闘が続くこととなつた。

第三幕 めつと私はめつめて ～その2～

家に帰ると、私は母に合唱祭で伴奏することを伝えたが、母はいい顔をしなかつた。

「まあ暮葉がやりたいなら反対しないけど、受験は大丈夫なの？練習しなきゃいけないし、それに貴方は、レッスンをもう半年も休んでてブランクがあるでしょ？」

母は、心配の言葉を続けざまに言い放つた。

「仕方ないから、やる」とこした。教頭にも、担任にもお願ひされたら、断れないから。」

そう私が言つと、母は大きく息をついた。

夕食の時間になり、父が帰つてくると、同じような反応だった。
「暮葉が学校行事に一生懸命になるなんて珍しいな。なんか心境の変化でもあつたか？」

晩酌を楽しむ父は、さりに何かを言つたそつた表情をしていた。

それを見透かした私は先に言おうとした瞬間、母は私の言葉を遮つた。

「まあ、拓海君にいいところを見せたいのはわかるけどね。せつかく仲直りしたわけだしね。」

「そんなんじゃなこよ。」

すべて言われてしまつた私は、早々に「」飯を食べ終わると、部屋に戻つた。

翌日になつても、淡々と音合わせをする時間が続いた。

樺沢は、なかなか一曲を通して歌わせない。

私が聞いている限り、そんなに大きくペッヂチを外しているといつはない。

確かに、よく聞けば半音外している箇所が数箇所あるけれど、それほど致命的なものではない。

ほぼ譜面を確実に音に起しりかじては成功しつつある。

だから、このまま歌い込んでいけば、ゴールには到達しそうな予感がする。

これは私の予感だけど、樺沢は何かを待つてこるような気がした。

このクラスの中で、今までにならぬ化学反応が起きることを期待して、樺沢は無理して上から重石をしていく。

募る不信感と、求める期待感が正面から激突して、一触即発とはいつことを言つのだろうか。

夕暮れを迎えて、ようやく今日が終わりを告げる。

帰る生徒の足取りは重い。

満たされない欲求と、求める達成感とのギャップに、それぞれ苦しみでいるような気がした。

「ねえ、なんで樺沢はあんなに厳しいの？」

由香里は帰らうとする私の背中を捕まえた。

「まあ、樺沢にもなにか思つといふがあるんでしょう。それが、なんのかは、わからないけど。」

私も諦めたような口調で言った。

由香里と一人廊下を歩いて帰る足取りは、私も確かに重かつた。

職員室の前を通り過ぎようとしたとき、樺沢が慌てて飛び出してきた。

「中村さん、ちょっといいかな。」

呼び止められた私は、由香里を外に待たせたまま、職員室の中に連れ込まれた。

職員室の片隅にある衝立の奥の黒いソファに座られ、今にも進路指導が始まろうついた状況。

テーブルを挟んで座った樺沢は、真っ新な五線譜を私の前に置いた。

「これはまだ秘密にしておいてもらいたいんだけど、ちょっと伴奏をアレンジしてもらおうと思つてね。毎年、金賞を取ったクラスは、アンコールでもう一回演奏するのを知つてるよね。そのアンコール用に、前奏と後奏の部分に、自分なりでいいから、音を加えてもらいたいんだけど、中村さんならできるよね？」

私は何も音が入っていない五線譜を手にとつて眺めた。

「でも、それは金賞でなければ、演奏される」とはないわけですよね。」

樺沢は黙つて頷いた。

「それでもいいから、これは最終盤で必ず練習はする。それがモチベーションになるから。だから、とりあえず黙つてくれないか？」

「わかりました。用意しておけばいいんですね。」

そう言つと私は席を立つた。

「ちよつと待つて。」

樺沢は私を引き止めた。

譜面を持つたまま、衝立を越えようとした私に、譜面をカバンに入れるよう指示した。

「お願ひ、頼むよ。」

樺沢は座つたまま、私を真つ直ぐ見上げていた。

ただ、その目は私を見ているところより、私のずっと背後に飾られた金賞の小さなトロフィーを見ていたのかもしれない。

廊下に出ると、壁に寄りかかって由香里が待っていた。

「ねえ、何言われたの？」

私はとつあえず秘密を守ることにした。

「これからも頑張ってくれ、だつて。」

つまらなそうな由香里と、私はすっかり日が暮れた玄関を出て行つた。

第三幕 もうと私はやめにして その3

この日の夜、私は家のピアノの蓋を開けた。

樺沢に言われた宿題に、私の時間は割かれていく。

「ピアノもいっけど、勉強もちゃんとしなきゃね。」

練習する私の横に来て、母は嫌味たらしくならぬ精一杯の小言を言い去つていった。

前奏に少し音を足して、後奏ではそれを繰り返すこととした。

受験勉強もあるし、そんなに練習に時間を割いてはいられない。

もうひとつ五線譜に音符を鉛筆で書き込むと、それを何度も弾いてみる。

それを何度も繰り返して、なんとか聞いても遜色ない音になつたところで、今田のところは切り上げた。

これをしたから、特別に評価されるわけでもない。

こんなことをしたいために、ピアノのレッスンを受けてきたわけでもない。

ただの幼少時代の暇つぶし程度だったはずが、いつしか私の一芸一能になっていた。

それを評価する人が現れて、それを利用したい人がいる。

私は、そんな他人の都合に振り回されて、このまま流れしていくのかと思うと、とても情けない気がした。

ベッドの上で目を閉じてみても、落ち着かない感じがして、横になつたり、起きてベッドに腰掛けてみたり、自分のやつていうことが、私自身で理解できなくなってきた。

連日、午後から練習漬けの毎日になつた。

徐々に他のクラスも合唱が完成しつつある。

体育館でのリハーサルの日程が決まり、各クラスに一回の練習時間が用意された。

前のクラスが練習を始める時刻になつたら、体育館に入つて回つてくる順番をステージの下で待つ。

その間、前のクラスが練習している様子をつぶさに観察できるけど、その分自分のクラスも次のクラスから鑑賞されることになる。

今日はその練習日に当たつている。

合唱祭を目前に最終調整の時が来ている。

こんなに緊張感があるステージ練習は初めてだった。

入学以来、一年続けて適当に合唱祭に参加するだけ。

ステージ練習も、時間一杯まで練習するクラスがほとんどなのだが、私が居るクラスはいつも、時間を何分も余して終了。

生徒は適当に時間になつたら現れて、そのまま思い思いの場所へ散っていく。

それが今年は初めて一緒に集合して、ステージに上がらうとしていた。

いよいよ時間になり、私はピアノを前に椅子に座った。

制服の袖を肘まで上げる。

両手を握つて開くと、口の前で手を合わせた。

鍵盤に置いた指から冷たさが浸透する。

指揮台が軋む音がした。

一段高くなつている指揮台にゅうくじと上がつた結哉見ると、生徒の背中でよく見えない。

私は、少しずつ生徒にすれてもらい、結哉への視界を確保すると、結哉が大きく手を振り出した。

初めてのステージ練習が始まった。

樺沢がステージの真下で、スコアを片手に拍子を取る様子が、指揮台の脇に垣間見える。

普通のステージ練習は、音楽教師が付き添うのが通例なのに、なぜか私のクラスは担任の樺沢が練習を仕切っていた。

スケジュール管理から指導まで、音楽教師を締め出して、自分で仕切る樺沢の熱意は、確かに私も感じている。

昨夜までの不信感は、ようやく私の中で整理されようとしていた。

「とりあえず、この人がやる気になっているから、協力してやるか。」

私は心中で自分に言い聞かせた。

第三幕 わざと私はわざわざして ～その4～

翼口は音楽室での練習口。

今日、樺沢はアンコール用のアレンジを用意していることを告げた。

昨日のステージ練習でも、樺沢は何度も演奏を止めた。

制限時間一杯まで、樺沢の指導が続き、結局一度しか一曲を通して合唱できなかつた。

疲労が出来始めているクラスに、樺沢はわざと無理強いをしているようだつた。

「ひょっと前奏だけでも弾いてみてくれる?」

樺沢の指示通り、私は新しいアレンジをした前奏を奏でた。

徐々に響めきが起き始めたところで、私は演奏を止める。

「少し転調した?」

樺沢は私のほうを見つめていた。

特に意識したわけではないけれど、私はひとつ上へ移調していた。

「金賞取つたら、アンコールは、この新しいアレンジでいくから。」

樺沢は高らかに宣言したものの、生徒の反応は今ひとつ。

「まあ、優勝したら、そのとき考えればいいんぢゃない。とりあえず、中村と俺が打ち合わせて準備するから、みんなほこのまま練習を続けよう。」

結哉はそういう放つと、練習を再開した。

樺沢以上に存在感を示したのは、学級委員の拓海や由香里ではなく、音楽少年の結哉だった。

四十人を率いてクラスを統率し始めた結哉の成長を、樺沢は嬉しそうな表情で見守っている。
その様子を、私は音楽室のピアノから、じっと見つめているだけだった。

合唱祭前日は、会場の準備とリハーサルで、一日が費やされた。

一回目のステージ練習に、樺沢ももちろん付き合つたが、今回は何も指示することなく、体育館の真ん中でスコアを見つめているだけだった。

樺沢が立っている脇を、忙しく生徒が行き交い、徐々に椅子が並べられていく。

会場設営の雑踏の中で、結哉を中心に樺沢が指摘していた課題を修正する。

制限時間ぎりぎりまで練習したけれど、都合一回しか全体を通して合唱できなかつた。

けれど、やれることほやつたような気がした。

一週間前まで、まつたく手の施しようがない退廃ムードを一掃して、よくここまで来たと思う。

今年も合唱祭なんて参加するだけと思っていたけれど、気がついてみれば主役の一人に押し出されている自分が居る。

体育館から渡り廊下を通つて教室へ戻る途中、職員室前のトイレに教頭先生と樺沢が入つていぐのを見かけた。

私は気になつて、隣の女子トイレに入つて、一人の会話に聞き耳を立てた。

トイレの入口は隣同士で、壁一つ挟んで個室が作られているため、いつも男子がトイレで女子への不満を垂れているのを聞いていた私は、鍵を掛けて隣の会話に聞き入つた。

「今年は金賞、いけるんじゃないですか。」

教頭先生の声がトイレに響く。

「どうでしようかねえ。でも、最強の布陣であることは間違いないです。」

いつもは小声で話す樺沢の声が、壁に反響して張りが出てこる。

「それにしても、よく中村さんを抱き出しましたね。彼女は、なかなか賢いですから、こういう役は引き受けないと思つたんですがね。」

白を切る教頭先生に、私は背筋が寒くなつた。

「いやあ、ずるいですねえ。教頭先生が説得されたんでしょう？ 中村が教室から出て行つたときは、どうなるかと思いましたけど、しばらくして戻ってきたときには、今日の夕方に配られるはずの楽譜を持つてました。あれは、教頭先生が渡されたんですね？」

樺沢は、私と教頭先生の間でどんな話があつたのか、わかつていた。

「鋭いですねえ。いやあ、感服しました。」

教頭先生の高笑いは、廊下まで響くような音だつた。

「中村さん、といふより私は、暮葉ちゃんと呼んで可愛がつているんですがね。朝から不機嫌だと彼女はよく私が眺めている体育館の渡り廊下に来るんですよ。彼女は天才肌ですからね、気が乗らないといつやらないんですよ。彼女のハートに火をつけるには、彼女の中にある自尊心をくすぐるしかないと思いましてね。実のところ、私も彼女のピアノには興味がありまして、どうしてもやらせてみたかったです。」

教頭先生は、私を冷静に分析していた。

「中村には、他人の気持ちを揺さぶる音楽センスがあります。そ

れは、私は間違いないと思います。本当に纖細で今にも切れそうな細い旋律を奏でる彼女のセンスは、他には真似ができません。」

樺沢はなにかに取り憑かれたように、自信たっぷりの口ぶりだつた。

「彼女は将来、大化けしますよ。私もたくさんのお弟子を見てきましたけど、彼女は期待できますよ。自分の世界をしつかり持つて、このまま大人になってくれれば、きっと素敵な女性になりますよ。それは私が保証します。じゃあ、明日。期待してますよ。一回目の演奏があると、いいですね。」

水道が勢いよく出る音が辺りに響いて、二人の声はしなくなつた。

私はしばらくその場を動けなかつた。

初めて他人の自分に対する評価を聞いて、それが当たつていて、とても恥ずかしくなつた。

一気に体に疲れが出て、急に体が重くなつた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9912d/>

天国に吹く青い風

2010年10月15日08時48分発行